森の木魂（こだま）

2025 年 8 月 1 日発行　第 15 号

目次

・森づくり 20 年を迎えるにあたって …… 1
・第 6 回総会報告…… 2
・「気候危機に向き合う生活を考えるシンポジウム」報告…… 4
・荒廃する日本列島～危機的状況下のライフライン～ …… 6
・身近な自然と環境の変化 …… 8
・政治を変えて再エネへのエネルギー転換を …… 9
・足尾花見の会…… 10
・20 年の支援に感謝を込めて「エコ散歩 in 足尾」を開催‥11
・「松木郷の森」案内の会を開催しました！ ……12
・4･29 中倉山の「ブナ恩送り」……16
・南相馬へようこそ ……18
・気候沸騰時代の「森づくり」の意義/お知らせ・編集後記‥19

森づくり 20 年を迎えるにあたって

足尾の森づくり 20 年を迎えるにあたり、これまで森びとプロジェクトの活動にご支援ご協力をいただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災とそれによって引き起こされた東京電力、福島第一原子力発電所爆発、当時私は南相馬市長として大震災と原子力災害対応に奮闘しておりました。大津波で 636 人が犠牲となり、原発事故によって 20 キロ避難指示、加えて 30 キロ屋内退避指示が出され、放射線汚染から市民の命を救うために 60,000 人以上の市民を市外へと避難誘導してきました。津波で被災した家屋や災害、廃棄物を焼却するのではなく、残された命を守るための防潮堤づくりの資材として活用することを決めました。そのような中、足尾で森づくりをしている森びとプロジェクトの支援もいただきました。改めてご支援いただいた皆様方に感謝を申し上げます。森びとプロジェクトの足尾の森づくりに共感し、2012 年に私も足尾の植樹に参加をしました。銅山開発で二度と木が生えないほど汚染されたはげ山に植樹して山を再生するという、とてつもない難しい課題に取り組んでいる姿を見ることができ大変力づけられました。

足尾の森づくりが始まってから 20 年が経ちました。足尾には森が蘇りつつあります。多くの生き物たちが活動をし始めました。人間が犯した環境汚染という罪を償うべく活動してきた姿は、全世界で進みつつある気候変動、環境危機に対する人間の罪滅ぼしであると同時に、世界に発信できる環境保護へ勇気を与える活動でもあると思います。世界中で異常気象による災害が加速度的に進んでいます。世界中が経済優先の取組みを声高に進めることは、地球に住む全ての生命を危機に追い込む犯罪です。さらに、地球温暖化や原発事故を忘れたかのように、「今だけ、金だけ、自分だけ」の考え方は許すことはできません。

このような中、森びとプロジェクトの活動はこれからも地球に暮らす全ての人の光になる活動だと信じています。今後も自信と誇りを持って活動に取り組んで参りましょう。

最後にこの森づくりの活動が、皆様のご協力のもとに続けていけるよう、皆様のご健勝をお祈りし、感謝の言葉といたします。ありがとうございました。

運営委員会代表　桜井勝延

事業報告

第 6 回総会報告

6 月 21 日(土)、東京都品川区の目黒さつきビル会議室において第 6 回総会を開催し、目黒さつきビル会議室と Zoom によるオンラインで行いました。

13 時、小黒運営委員の司会で総会が開会され、総会には正会員 352 名中委任状を含む 246 名の参加があり、規約に基づき会員の 3 分の 1 以上の出席を確認し、総会の成立が宣言されました。議長には正会員の新保哲之さんを選出し、議事進行が行われました。主催者あいさつ以降、議事次第に基づき第 1 号議案：2024 年度活動経過報告、第 2 号議案：2024 年度収支決算報告、会計監査報告を行い、第 3 号議案：2025 年度活動方針案、第 4 号議案：2025 年度予算案を提案しました。その後、質疑応答が行われ、会場とオンライン参加者の 10 名から各地での活動が報告されました。

今総会では、大野昭彦運営委員と高橋佳夫森づくりアドバイザーが退任をされ、新たに運営委員に広報アドバイザーの大山寛恭さん、永島守さんが加わっていただきました。総会をつくり出していただいた会員の皆さま、活動を支えて下さったすべての皆さまに感謝申し上げます。

森びとプロジェクトは NPO 結成から 20 年目を迎えました。会員の皆さまをはじめ、地域や様々な方々とのつながりや、森と生き物たちとのつながりを大切にし、生態系豊かな森をめざした「育樹活動」と「啓発活動」の両輪で、今後も歩を進めてまいります。

第 6 回総会の発言要旨

総会では 10 名の会員より発言をいただきました。

2011 年の東日本大震災による津波で被災した海岸線に森の防潮堤をつくることになり、「俺が木を植えるのはここだ」と決意し、仲間と共に森づくりに取り組んできました。

当初は、荒浜は砂地だったので土や腐葉土を混ぜて土壌をつくりました。また、名取は水はけが悪く、穴を掘り、土を混ぜ土壌改良を行ってきました。植えたばかりの苗木は冬の寒さや海の潮風、蔵王おろしの強風で枯れてしまったものも多く、補植を繰り返してきました。苗木より高く伸びた草刈りも大変な作業でした。最近は木々も大きく生長し落葉樹の落ち葉が地面を覆い、土壌動物によって土がつくられ木々の根を支えています。

森づくりを通じて樹種を覚え、ドングリの違いや葉の見分け方など、色々なことを学ぶことが出来ました。手入れが行き届かなくてポット苗を枯らしてしまった時の無念さもありますが、子供たちがポット苗づくりや苗分けを楽しくやっている姿が印象的で、やってきて良かったと思います。人間活動によって地球に負荷をかけすぎ、回復力が失われつつある今、命を守ることを考えた行いが大切なことを仲間たちと共有し、荒浜・名取での森づくりを継続していきます。（宮城県　林雄一さん）

6 月 20 日、DOWA ホールディングスの「小坂・ふるさとの森づくり植樹祭」に秋田県ファンクラブ 4 人で参加しました。この植樹祭への参加は 6 回目になります。社員を含め市民、小学生 250 人が参加し、1,200 本を植樹しました。私の子供たちは八幡平の森づくりに参加し、家族は苗の株分けも行っています。孫が一人できて、大きくなったら一緒に南相馬市の植樹をしたいなと思っています。

小坂の森づくりについて、森づくりを始めた最初の気持ちに戻り、自分たちが育てた苗木を小坂の植樹会場に植えさせて頂きたいと、DOWA 小坂の森づくり担当者にはじめて話をしました。出来る、出来ないは別にして、私たちの気持ちを伝えさせていただきました。苗づくりは早くても 3 年かかると思うので、森づくりの仲間たちや子供たちとどんぐりを拾い、大切に育てた苗木を「小坂鉱山跡地」に植えたいと思います。（秋田県　高杉貢さん）

4 月 29 日に孤高のブナ保護と希望のブナの観察行動に参加しました。今回は、太陽は出ていましたが登り始めから寒く、頂上付近はものすごい風で、時折粉雪が舞う状況で、作業をする環境としては厳しかったと思います。

しかし、腐葉土運搬や植生袋の張り付け作業をしている皆さんを見た時、元気に明るく一生懸命やっていたのですね。腐葉土を駐車場からブナの木の所に運ぶのに約 3 時間かかります。ブナ保護に参加したそれぞれの思いがあったから出来たのかなと思います。義務では運べないと思います。私自身はどんな思いで運んでいるのかと言えば、煙害の生き証人であるブナの木を何としても生かすために出来る限り最大限の努力をしたいということと、希望のブナがどのくらい生長しているのか自分の目で確認したいという思いがあるから頑張れるのです。

山岳ガイドの方が、森びとスタッフからブナ保護活動の話しを聞き、感動して今回参加されていました。その話を聞いた時に、大切なことを学んだなと思いました。現状に満足し自分たちの世代だけで満足していてはこの活動は無い。自然環境を守るために新たな人に参加を促すことを意識的に行う。そのためには、たかが声掛けですが非常に大切なことだと思います。登山者への声掛けなどを通じて活動を広げていきたいです。（福島県　鈴木力さん）

■運営委員会からのまとめ（清水）

「20 年の森づくりは、単に木を植えたから育ったという事ではなく、シニアの先輩方がどのような森をつくるのかを自らが構想して意見を出し合い、一つの方向に向かって活動してきた結果、「臼沢の森」や「民集の杜」になっています。

荒廃地に多くのボランティアの皆さんが植樹し、生長した森には蝶が舞い、鳥がさえずり、アナグマの親子が住むなど、少しずつ生態系が蘇えりつつあります。森づくりを通じて、私たちは森に生かされ、全ての命の源は森だと、改めて学ぶことが出来ました。これからの 20 年の課題は次世代づくりです。多くの若者と一緒に森に入って、森づくりの楽しさ、そこに住む多くの生き物たちと触れ合えるような活動を作り出しながら"山と心に木を植える"をスローガンにして、"森は友だち！"を合言葉に森づくりを進めていきます。」などとまとめを行いました。

運営委員　清水卓

【運営委員会】（順不同）

新たな運営委員会のメンバーです。
皆さんどうぞよろしくお願いします！

●アドバイザー

政　　治：山崎　誠（衆議院議員）
科　　学：倉澤治雄（科学ジャーナリスト）
植　　生：中村幸人（東京農業大学名誉教授）
森　　林：川端省三（法人職員）

●運営委員

代　　表：桜井勝延（南相馬市議会議員）
副 代 表：清水　卓（法人職員）
運営委員：井上　康（法人職員）
運営委員：大山寛恭（会社員）＜新任＞
運営委員：小黒伸也（会社員）
運営委員：小林　敬（会社員）
運営委員：田城　郁
運営委員：永島　守（会社員）＜新任＞

●会計監査員

監 査 員：笹沼信男（会社員）
監 査 員：梁島幹雅

事業報告

「気候危機に向き合う生活を考えるシンポジウム」報告

4/20、一般財団法人日本鉄道福祉事業協会と森びとプロジェクトは共催で「気候危機に向き合う生活を考えるシンポジウム」を開催し、東京都品川区の目黒さつきビルと Zoom によるオンライン形式で開催しました。司会は JR 東労組本部で書記をしている飯田麻美子さんが務めてくれました。

主催者あいさつに立った森びとプロジェクト桜井勝延代表は「原発を止めるということから全く外れてしまい、原発を再稼働したり、新たな原発を作るという方向に日本政府は舵を切ってしまいました。被災者はもちろんですけれども、暮らしや命がぞんざいに扱われてはならないことをシンポジウムを通じて共有して欲しいと思います。同時に、本当に原発を再稼働することが地球温暖化や気候危機に対する方針として正しいのかということについても共有していただきたい」等が語りました。

その後、4 名からそれぞれの立場・現場から問題提起をしてもらいました。

1 人目は東京都でマンションにお住いの奥村隆夫さんより、「気候変動に対する体験と対処・対応の限界」について報告をもらいました。2019 年 10 月に発生した台風 19 号により川崎市武蔵小杉のタワーマンションのライフラインが水没。電力・水道の機能が停止し、完全復旧と対策には 1 年間要しました。自分事として捉えて、自宅のマンションが浸水した時の危機感から、調査を開始するとともに自治体への要望やマンション住民へ呼びかけて対応策の検討をしたそうです。そして、異常な気候変動に危機感を感じている人々や組織体は多く存在するので、互いから学び、協力・連帯することが大切であることが語られました。

2 人目は、秋田県の JR で働く高橋淳さんから、「2 月 22 日 22 時から明朝 5 時までの間で、秋田県県北地区の普段雪があまり降らない所で大雪となりました」「秋田県と青森県の県境で倒木あるいは線路支障しているのが 2 日間で 166 本確認されました。また、切断作業中に腹部に倒れてきて肋骨を骨折する二次災害も発生させてしまいました」「今回の雪害は、死者が出なくて良かったと感じます。ライフラインが断たれるとは想定しましたが、運良く短時間で復旧となったことや、高齢者住宅で屋根の雪下ろし作業が行われず倒壊してしまうこともなく、結果から運が良かっただけとしか思えません。また、鉄道以外の交通インフラも運転再開までかなりの時間を要しました。道路も通行止めとなり、そういう環境で生きるためにどうするべきか改めて考

えさせられました。このような災害級の大雪は発生するものと想定し、構える・備えることをしていきたいと思います」等が語られました。

3人目は、茨城県利根町で農家をしている齊藤博道さんから「大規模化している農家にとっては補助金を使い、飼料米を作ればある一定の金額が保証されるという制度があります。しかし、我々小規模農家はほとんどが飼料米を作らず、食用米を作っているのが現状です。実際、食用米が今まであまりにもコストに対して、見合わない金額で、農協や集荷業者にとって買い取られるという状況でした」「小規模農家がこの国は今までも支えているのが現状です。これから小規模農家が減少していけば、必ず日本は食糧危機が来ると実感しています」「単なる米の生産だけではなく自分で営業努力しながら、個人のお客さんとの繋がりを作りながら、直販というスタイルを確立して何とか継続しています。野菜農家や米農家と直接繋がって信頼できる人間関係を作りながら食料を調達するという時代になるのが理想的だと思います」等が語られました。

4人目は、若者気候訴訟原告団の時任晴央さんから、相次ぐ森林火災・森林伐採の報道を見て、将来への不安を感じて気候変動に関する活動を始めた経緯が語られました。そして、昨年8月に14歳から29歳の若者たちが日本の主要火力発電事業者10社（CO_2排出の30%を占める）を相手取り、1.5℃目標と整合する科学と国際合意の水準での排出量の削減を求めて、名古屋地裁に訴えました。シンポジウム参加者に最後に訴えたのは「私よりも後に生まれた世代がかつての地球の現状を知り、私になぜ何もしなかったんだと問われる時が来ると考えると絶望します。気候危機が二度と止まらない日がやってくることを想像すると、生きていく自信がなくなります」と、原告からの意見陳述での言葉が紹介され、参加者の心を熱くしました。

時任晴央さん

飯田麻美子さん

最後に、副代表の清水卓より冒頭4名の方からの問題提起、質問や意見を言ってくださった参加者、コメントをいただいた元NHK記者・吉村秀實さんへの御礼を述べました。その後、「森びとは森づくりを通じて、地球環境と人間のいのちを大切にする心を育むことを目指して活動を進めています。時任さんと津田さんからは、「若者の気持ちをどういう風にわかってもらうかがが難しい」と言われました。20年前、足尾のハゲ山に木を植えると伝えると、あそこに木を植えても3年で枯れると言われ、環境問題の話をすると、あいつは変わりものだと言われました。それでも皆さんと一緒に力を合わせ、足尾の山に木を植えて、手入れをしていくと、緑が少しずつ蘇り、多くの生き物がいのちをつなぐような森になっています。目的を持ったら具体的に実践をすること。そして、実践する仲間を増やしていくことが大切です」等、まとめがありました。

運営委員　小林敬

最後に…

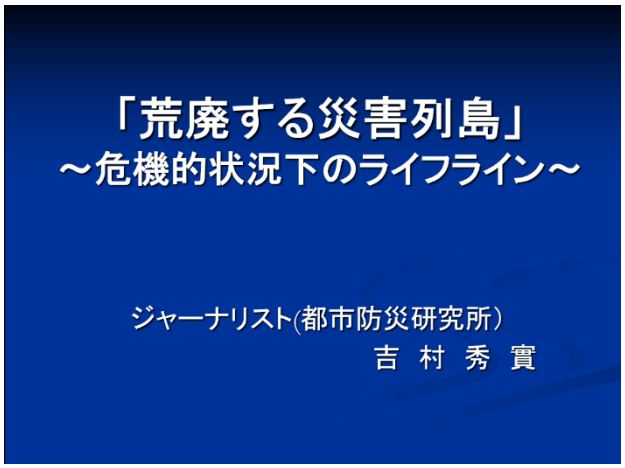
原告からの意見陳述での言葉

私より後に生まれた世代がかつての地球の現状を知り、私になぜ何もしなかったんだと問われる時が来ると考えると絶望します。

気候危機が二度と止まらない日がやってくることを想像すると、生きていく自信がなくなります。

特別寄稿

荒廃する日本列島~危機的状況下のライフライン~



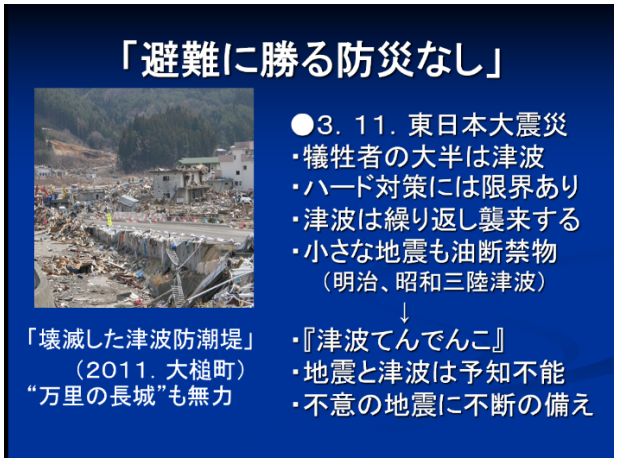
はじめに

長くて難しいタイトルのシンポジウムだと思いながら参加しましたが、当日は興味深く面白い報告ばかりで、やはり現場からの報告は目新しくて迫力に満ちた内容でした。シンポの冒頭、「森びとプロジェクト」代表の桜井勝延さん（元南相馬市長）の挨拶は、『原発震災』で手ひどい被害を蒙って以降、原発に依存しない街づくりを目指して来た首長だけに、参加者の多くが共感するものでした。個人的には「東海村 JCO 臨界事故」（1999 年）の際、独断で村民の避難を優先させ、原発震災直後は『人に冷たくかつ無能な国では原発を持つべきではない』と表明するなど、原子力撤廃の姿勢を鮮明にした村上達也元東海村村長（82 歳）を彷彿とさせるような桜井さんでした。

荒廃する日本列島

近年の災害は忘れないうちにやって来ます。今年の 1 月 28 日の早朝、埼玉県八潮市内で起きた大規模な道路陥没事故は、救助・救出や復旧作業の難しさもさることながら、私たちの足元の下水道管の破損事故が、遠くの街のライフラインにも大きな障害を及ぼしたことに衝撃を受けました。インフラストラクチャー（社会資本）の中でも、ライフライン（命綱）とは、私たちの命を支える電気、ガス、水道をはじめ、道路、鉄道施設などを指しますが、災害工学という学問分野では、原子力発電所などのエネルギー施設も含まれるそうです。このライフラインが全国各地で、建設後 40~50 年と言われる耐用年数を超え、経年劣化による“綻び“が出ていることに加えて、国や地方自治体の保守管理や改修に対する消極的な姿勢が今、日本の大きな社会問題になっています。

かつて『荒廃するアメリカ』が大きな社会問題になったことがあります。世界に先駆けて“自動車王国”を達成したアメリカでは、1962 年 12 月、オハイオ州とウェストバージニア州を結ぶ近代的な吊り橋「シルバーブリッジ」が突然崩落してオハイオ川に転落しました。クリスマスの買い物客の乗用車など 31 台が崩落に巻き込まれて落下、46 人が死亡するという大惨事が起きました。原因は橋の基礎構造である鋼鉄製のチェーンが劣化していたことが判明しました。この事故を契機に、アメリカでは道路橋などが老朽化しているのに、その維持管理に十分な予算が投入されていないことが明らかになり、1960 年代初頭は劣化する道路橋などが大きな社会問題になり、『荒廃するアメリカ』(S・ウォルター著)が出版されました。



自然災害と人為的災害

災害（Disaster）と言うと、日本人の多くは昔から自然災害（Natural Disaster）を連想しますが、欧米諸国では人為的災害（Man-made Disaster）も含めます。人災とは交通事故や鉄道事故をはじめ火災や環境破壊、公害などを言い、最悪な人災は戦争災害です。言わずもがなのことですが、地震や火山噴火、集中豪雨や干ばつ等々の自然災害は、発生を防ぐことはできない一方で、人災は人間の知恵や努力によって防ぐことはできるはずです。

2001 年版の「防災白書」では、21 世紀中に予測される災害として、①地球温暖化による自然災害の増加②ヒートアイランド現象による巨大都市特有の自然災害の増加③南海トラフ地震や首都圏直下型地震など、より切迫する巨大地震④富士山や桜島など活火山の巨大噴火⑤高齢化、都市化、過疎化に伴う災害発生の危険⑥新たな災害の脅威の出現などを挙げています。日本では既に懸念された通りの災害が発生していますが、とりわけ地球温暖化に伴い、世界各地では酷暑と酷寒が相次ぎ『地球の沸騰』と言われるように気象の極端化現象が進み、洪水被害や土砂災害、干ばつの被害が深刻です。

アメリカよりも 20 年後の 1982 年、『荒廃するアメリカ～公共投資を怠った米国の悲劇とその処方箋～』が日本でも翻訳出版されました。国土交通省は 2004 年の時点でも、アメリカではなお 30%弱に当たる約 17 万橋の欠陥橋梁が存在していると指摘する一方で、日本でも 1960 年代の高度経済成長期に急ピッチで進んだ道路設備も、適切な管理を怠ると日本も荒廃すると警告しています。

都市の安全保持は国や自治体の一番の仕事

今から丁度 100 年前の 1925（昭和 4）年、関東大震災（1923 年 9 月 1 日）を契機に創立された「東京市政調査会」は、月刊誌『都市問題』を創刊しました。本誌は敗戦の直前に一時休刊を余儀なくされましたが、1950 年に復刊し、建築家の佐野利器＝東京市政調査会副会長は、『新日本の再建の成否は、全国二百余都市の市政の隆替（りゅうたい）にかかっている』と地方自治体の重要さを強調しています。また、かつて東京市長をつとめた後藤新平は「都市問題」の創刊号で『一喝風雲を破る』という漢詩を揮毫、創刊の辞で『人口の都市集中は歴史の必然である』とした上で、都市に内在している社会欠陥の是正に寄与することこそが国や自治体の使命だとしています。今の日本の政治家たちにこうした気概があるでしょうか？ジャーナリズムは政治に対する監視は怠ってはいないでしょうか？政治家としての“先見の明”とは、こういうことを言うのです。

(2025 年 5 月 5 日・記)

ジャーナリスト・都市防災研究所　吉村秀實

吉村秀實

日本を代表する災害ジャーナリストであり、防災評論家、元NHK 解説主幹。NHK 退職後は、フリージャーナリストとして、防災・リスク管理に関する執筆や講演を行うほか、原子力安全委員会・防災部会や都市防災・市民防災研究所など複数の団体で活躍。現場ジャーナリズムの視点を活かしながら、未来への備えと社会理解を深める取り組みを続けている。

アドバイザー提言

身近な自然と環境の変化

「東風吹かば匂いおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」に詠まれたような日本人の感性を育む季節感が失われてきています。30 度超えの 6 月に聴くウグイスの啼き声に違和感を感じます。日本の路傍に普通なネズミムギなどの外来牧草、いつもは早春に成長して 5 月上旬に開花、結実して、枯れてしまう越年生植物です。枯れた後にヨモギ、イノコヅチなどの夏型の多年草と交代するのですが、今年は 6 月下旬になって開花し、後続の多年草と混在して季節によるすみわけが上手くいっていません。

犬の散歩に出かける裏山に幅が 60 ㎝ほどの小さな沢があり、水が枯れることなく流れていました。しかし、2 年ほど前から豪雨時に大量の水が流れ、川幅が 2m ほどに拡大して道路を越流するようになりました。集水域の頂部に拡がっていた薪炭林がメガソーラーに変えられたことも一因となっています。

思い起こせば、小さいころに当たり前にあった田舎の豊かな自然、水田を埋め尽くすヘイケボタル、夏の小川に潜れば、澄んだ流れにウグイ、オイカワ、タナゴ、カワエビ、身近な自然がみな消えてしまいました。工業化、農業の近代化が背景にあったのは言うまでもありませんが、その影響が地球規模となって現れています。ほかの生物が死に絶えて人間だけが生き延びることは決してありません。物質的な豊かさを追い求めて人は幸せを手に入れたのかと問えば、明らかに No というのが今の現実です。

人は効率性を追い求めて近代化を進めてきましたが、自然という生物と環境をつかさどる生態系が求めたのは多様性なのです。生物にそれぞれいろいろな仕事を割り振って、物質とエネルギーを回し、安定した生物社会を構築しています。生態系の循環の中では無駄なものは出ません。人の言う「ゴミ」は自然界には存在しないのです。

日本の陸地には鉱物資源はありませんが、自然資源はとても豊かです。世界第一級といっても過言ではありません。すなわち土地の生産性が高く、しかも異なる豊かな環境が地方に存在します。地域の環境を活かしたこまめな暮らしの立て方、四季に応じた野菜作り、家畜を利用した物資循環を集約的に行ない、自然との共生を図っていた昔は、生態系に即した暮らしの知恵となっていたのです。

かみさんが知り合いの梅園から梅を沢山収穫して戻ってきました。高齢化により人手が足りずに放置される農業、収穫に間に合わずに棄てられてしまうことがあちこちで見られます。仕組みを変えて、若い人たちが夢と誇りを持って地域で取り組む多様性農業の復活を願わずにはいられません。

植生アドバイザー　中村幸人

アドバイザー提言

気候危機への対応は待ったなし、政治を変えて再エネへのエネルギー転換を

2023 年、2024 年の夏は 2 年連続で観測史上 1 位の記録的な猛暑となりました。2025 年は過去 2 年には及ばないものの、気温は平年よりかなり高く、猛暑となる見込みです。梅雨入り・梅雨明けが早く、夏の前半から台風の発生が多いと予測されています。

地球規模で見ると、温暖化に伴い極端な気象現象が増加・激化しています。過去 50 年間で洪水や熱波など気候関連災害の発生件数は 5 倍に増加し、延べ 200 万人以上の命が失われました。世界各地で「観測史上最大級」の災害が毎年のように報道されています。日本でも、平成以降豪雨や台風による「数十年に一度」の大災害が頻発するようになっています。このように温暖化の影響で気象災害のリスクは確実に高まっています。

食に与える影響も深刻です。令和の米騒動と言われ、その供給の危機が叫ばれる米も温暖化の深刻な影響を受けています。 2023 年、全国で収穫されたコメの一等米比率（最高品質米の割合）は 59.6%にまで低下し、調査が始まった 2004 年以降で過去最低を記録しました。特に日本有数の米どころである新潟県では、一等米比率が前年から 60 ポイント以上も激減して 13.5%に落ち込む深刻な被害となりました。これは、生育期の高温により米粒に白濁やひび割れが発生する「高温障害」が多発したためです。高温障害を受けた米粒は等級が下がり市場に出せなくなるため、結果的に猛暑の年は国内のコメ供給量が数十万トン規模で減少するとの推計もあります。私たちの食卓を支える農業・食料供給は、地球温暖化の進行によって確実に脅かされ始めているのです。

こうした深刻な事態に直面しているにもかかわらず、国の対応には危機感が見られません。本来であれば、日本は先進国として気候危機対策に率先して取り組むべきところですが、政府はエネルギー・重工業を中心とする産業界に忖度して求められる温室効果ガス削減目標を設定できずにいます。今年 2 月に政府が決定した 2035 年、2013 年比 60%削減という目標は IPCC が求める削減量の最低レベル（環境省はこの事実を隠そうとしています）であり、政府がよく使う「野心的」という言葉には全く当たらない消極的なものでした。中長期の視点に欠ける日本の政治・行政の問題点が露呈しています。

一刻も早く化石燃料、原子力依存から脱却して、再生可能エネルギー100%で脱炭素社会を実現しなければなりません。太陽光、風力、水力、地熱、バイオマス、波力、潮力など再エネには様々な種類があり、地域によって可能性のあるエネルギー源は多様です。こうした再エネを組み合わせて「再エネによるエネルギーミックス」を実現する、火力や原子力のような中央集中型の仕組みから再エネによる地域分散ネットワーク型システムへの移行が急務です。気候危機への対応に残された時間は僅かです。政治を変え、政策を変え、気候危機にしっかりと向き合う日本を創りましょう。

政治アドバイザー　山崎誠

足尾発！

足尾花見の会

4月25日（金）11時から、足尾町民20名と森びとスタッフ7名の参加で「足尾花見の会」を開催しました。開会は「みちくさ」前の苔テラスで行われ、副代表の清水から歓迎あいさつのあと、町民一人ひとりに自己紹介をしていただきました。その後は各自が森びと広場や心の園、果樹園などを思い思いに散策しました。

各種の桜をはじめとした草木や花々を愛でた町民の皆さんからは、「松木で花見が出来るようになるなんて思いもしなかった！」「こんな綺麗な松木になっている。戻って住みたい」等々、感嘆や感激の声を口々に聴くことが出来ました。

昼食会では山田組・山田功会長より乾杯のあいさつがあり、「20年前は荒涼とした褐色の荒野であり、この緑の中で花見が出来るなんて考えられなかった。森びとさんの、失敗しても諦めない試行錯誤があり、この風景がある。本当にありがたい」と感謝の意が述べられ、皆さんで歓喜の乾杯をしました。メニューは、済賀スタッフ手製の竹の子の煮つけと竹の子ご飯、セリの胡麻和えに加え、けんちん汁をはじめ町民の皆さん思い思いの差し入れで豪華な昼食会になりました。

昼食後、「みちくさ」に場所を移動して感想、意見交換をしました。橋倉スタッフからは足尾への移住者として「負の遺産」だけでなく、「誇れる足尾」を皆さんで創って行きたいがいかがかでしょうかという問題提起がされました。町民からは「私も東京で出身地を聞かれ、思わず日光と言ってしまった」「負の遺産と思っていたが歴史を勉強し、日本を発展させた良い遺産もある」等々、様々な思いが率直に語られました。特に、「私は、森びとさんでなく夢びとさんと思っている」という言葉には、スタッフ一同が勇気づけられました。また、「家にシャクナゲが沢山ある。是非、この松木に植えたい」との思いが出され、実現に向けて動き出しています。

花見の会全体を通しては、感動、感嘆、感激の笑顔の会となりました。また、山田会長や和朗庵オーナーをはじめ、町民の皆さんが非常に協力的に準備に携わっていただき、継続的な交流の成果と言えます。

「来年も松木で花見がしたい」との嬉しい言葉に加え、「秋の紅葉も綺麗だろうなぁ」との声に応えるべく交流を積み上げ、共に創り、町民の誇れる足尾町を目指して活動していきます。

運営委員　田城郁

森づくり 20 年記念事業

20 年の支援に感謝を込めて「エコ散歩 in 足尾」を開催

5 月 25 日、20 年間森づくりにご支援いただいた企業、行政、諸団体等を中心に呼びかけた「エコ散歩 in 足尾」を開催しました。栃木県、日光市など 19 の行政･団体に呼びかけ 9 団体様が快く応えてくれ、当日 8 名の代表の皆様に出席をいただきました。

地主である古河機械金属（株）のご理解のもと、林野庁を始め各行政や各団体等のご支援・ご協力を頂き、煙害や山火事で樹々が失われた荒廃地に幼木を植え、森づくり活動を 20 年間継続してきました。お陰様で、約 6 万㎡に 8 万の本の苗木を植え、試行錯誤しながら小さな森を作ることが出来ました。今では、クマやサル、アナグマ、鳥や昆虫などの住処となり、松木渓谷に訪れる方々に「感動と安らぎ」をいただける森になりました。すべての生き物たちの命を守る「松木郷の森」の息吹きを感じて頂くこうと感謝を込めて森の案内をしました。

■感想や意見、アドバイスの要旨

a)「磯焼け」で海も大変なことになっていて、小学生が海中に「アマモ」を植えている。地球温暖化にブレーキはかからないが、20 年でこれだけの生い茂る森が出来たのだから、50 年、100 年と森づくりを続けていかなければならないと思い知りました。

b) 単純に植樹だけでなく、階段づくりや黒土の荷揚げ上げ、土留めづくりなど 20 年の実りのネットワークをもっと広げていく事が大切だ。

c)過去に起きたことをちゃんと次世代に伝えていく事が役割。木を植えることだけでなく、森びとがやってくれているように、下草刈りなど大変な手間をかけて愛情を持って育てていけば必ず木は応えてくれる。適切な管理・運営が大切だ。

d)都心の森を見ていますが、本日は本物の森を見せていただき、森を長く維持していく事は本当に大変なことだと知りました。

e)植樹活動をはじめて 20 年の森を観て、人が手をかけて、ボランティア活動とは言え、相当の目に見えないコストをかけてやれば大きなことができる、と羨ましく思いました。参考になりました。明治神宮のような立派な森になればと思いました。

f)今後は、もっと多くの人に「松木郷の森」を見てもらって、やっていることの素晴らしさを広めていく事だと思う。など、時間がない中で感想や意見を述べていただきました。ありがとうございました。

森びとプロジェクトは、長年支えていただいた皆様の声を大切に松木郷の森をすべての命を守る「母なる森」を目指し、子どもたちのため、持続可能な未来のためにスタッフのボランティア活動による手入れで適切に管理していきます。重ねて、ご参加頂きました皆様に感謝申し上げると共に、さらなる 50 年、100 年の豊かな森に向けて、“人は森がなければ生きていけない”“森は友だち”を合言葉に森の育樹と啓発活動に邁進していきますので、継続してご支援を御願い致します。

森づくりスタッフ　大野昭彦

■支援者の出席者

中村昌有吉様：林野庁日光森林管理署署長
山田　　功様：（株）山田組会長
菅沼　　清様：足尾町商工会会長
浅見　　茂晴：元毎日新聞記者
佐藤　　和様：（公財）三五自然共生財団事務局長
奥村　隆夫様：（一財）国鉄・JR 労働運動研究会
柳　　明則様：（一財）日本鉄道福祉事業協会代表理事
荒木　ユイ様：全日本鉄道労働組合総連合会政策政治部長

森づくり 20 年記念事業

「松木郷の森」案内の会を開催しました！

森びとが足尾銅山跡地で植樹を始めて、今年で 20 年目となります。6 月 22 日（日）、森づくり 20 周年記念「松木郷の森」案内の会を開催しました。3 つのグループに分かれ、運営委員とスタッフが案内をし、20 年かけて育った森を散策してもらいました。20 年間、多くのボランティアの方々の温かいご支援とご協力のもと、松木郷の自然が少しずつ豊かさを取り戻してきました。急斜面の臼沢の森での植樹を行うために階段づくりをして下さった方、森びとの活動を社会の問題として発信して下さった方、（個人的ですが）チェーンソーで木の伐採を教えていただいた NPO 法人の皆様、小学校でどんぐり拾いをし、3 年間ポット苗づくりをした苗木を足尾で植樹まで来て教育をされた校長先生、その校長先生を紹介してくれるとともに、もんぺを着て仲間とともに毎年植樹祭に来てくださった方、森作業では欠かせない美味しい水を短い安価で提供して下さった方、定年退職後に足尾の森作業で頑張るスタッフの皆さん、そしてそのスタッフを支えていた奥様。すべての皆さんを紹介できませんが、多くの方々のご尽力があってこその足尾での森づくり 20 年間でした。短い散策時間でしたが、参加された皆さんが思い思い当時の様子からは考えられないほどの森になっている姿に感動されていました。昼食後は、参加された皆さんと 20 年間の歩みを一緒に振り返りました。そして、100 年先の「母なる森」を目指して語り合い、貴重な意見とアドバイスをいただきました。

今後も森びとは、森を育み、人をつなぎ、未来へ命を繋いでいく活動を続けていきます。引き続きご支援・ご協力よろしくお願い致します！

参加された方々からの報告・感想を紹介致します。

運営委員　小林敬

6月22日（日）、私たち神奈川県ファンクラブは2005年5月スタート当初から足尾での植樹活動に参加していた「もんぺ座」（神奈川県川崎市を拠点として活動しているグループ）13名の方々と共に、「森づくり20年記念『松木郷の森』案内」として開催された「エコ散歩in足尾」に参加してきました。

私自身「もんぺ座」の方々との面識もなく不安もありましたが、事前にお誘いをするために運営委員の小林君と共にリーダーの平賀さん宅に伺って様々なお話をすることが出来ました。平賀さんは「もう二度と行くことが出来ない」と思っていたので参加の誘いに大変喜んでもらい、ぜひ参加したいと了承をいただきました。当日は小学5年生の女の子も含め、13名が参加してくれました。「もんぺ座」とは着物の着付けの先生である平賀さんをリーダーとしたグループで、古くなった着物をもんぺ（ご婦人の作業着）に作り直して、そのもんぺを羽織って参加していたご婦人方です。約15年間マイクロバスを貸し切って、毎年植樹祭に参加していた方々なので皆さんも見覚えがあると思います。

当日朝7時、JR南武線鹿島田駅に集合し、後輩の自家用中型マイクロバスと乗用車1台で道中4時間かけて足尾に向かいました。バスの中では平賀さんの「どんぐりの苗は可愛い」（この感性が素晴らしい。私では思い浮かばない）という言葉に心を打たれた小学校の元校長先生が一年生にどんぐり種付けを体験させ、3年間育った苗を四年生になった子供たちが植樹するという体験学習をさせた人間教育を取り入れていることなどのお話を聞くことが出来ました。

現地に降りたったもんぺ座の方々は、20年間で作り上げた臼沢の森や民集の杜を眺めて自分たちが植樹した木が分からないほどの森になっている状況を見て感動に浸っていました。森びと広場から植樹経過のある「民集の杜・西」を中心に上り坂や砂利道で足元が悪い中でも杖を突きつつ汗をかきながら歩きました。旧松木村はかつて養蚕が盛んな土地であり、もんぺ座では桑の木を植えたいと100本の桑の木を持参し植樹しました。しかし、植樹の初期であり、土壌改良もしてこなかったために枯れてしまったことなどを「民集の杜・西」と記載されている石の上に座りながら話されていました。

帰りのバスでは参加した感想を一人一人が述べ合ってきました。「もう来れないかと思っていたが参加出来て本当に良かった」「一人ひとりの心が聞けた。思いのある方々と行動出来て幸せだと思った」「人は森に生かされていると実感した」「人は森に寄り添うことが大事だ」「楽しそうに活動している楽しそうな仲間と会えて良かった」「森を見て人の力って凄いなと感じた」などの感想が出されました。

途中、足の悪い高齢参加者の手助けをしようとしたら「自分で参加すると言って来たんだから自力で行動しなさい」と厳しい言葉もあり少し驚きましたが、一人ひとりがもんぺ座の方々と行動を共にして、人間交流が出来たことと、生きざまを感じることができた一日でした。

最後に、来年の南相馬市鎮魂復興市民植樹祭などの神奈川県ファンクラブの行動に参加したいことが述べられ、再会することを確認して帰路に尽きました。

神奈川県ファンクラブ　代表　木之下貴弘

梅雨なのに、晴天に恵まれ一日堪能させて頂きました。緑深く、木々の葉から新鮮で美味しい空気をいっぱい体に取り入れることができ、元気を頂きました。

早速、高橋さんからビオトープを案内して頂いて、自然の力強さに驚きました。絶滅危惧種のシュレーゲルアオガエルの愛らしさと逞しさにうっとりさせられ、ひと時の癒しでした。また、子ども食堂の人たちが手づくりで作ってくれた弁当を美味しく頂きました。そして、森の一角に自分たちでシャクナゲを植えたいと森を通じた人とひととのつながりが広がっていることを実感しました。

臼沢の森の入り口に立った瞬間、涼しい風が歓迎してくれました。踏みしめ、登り始め、あの 20 年前の廃墟・砂漠化していたこの場所に、前日から泊まり込みで大きな穴を掘り、黒土・腐葉土を混ぜて混ぜて、翌日にその穴を掘り返し、3 本の苗を皆んなで植えたことがはっきり蘇りました。森びとスタッフの皆さんの森とのたたかいが、この森をこんなに元気にしたのだと感慨深い思いに至りました。階段を登る節々に、歴史を感じました。入り口に近いところは、腐葉土がいっぱい積み重なって、ミミズがいました。土壌の良さが証明されており、他の微生物なども無数に生きているのだろうと心が広がりました。2 段目にある松崎さんと宮脇先生とのツーショット写真には、感動しました。しかも、そのプレートにクマが爪を研いだ跡があることから今でも二人が自然の中で、重宝がられていることが窺えました。

私の記憶では、2007 年か 2008 年の植樹に、長野の仲間とともに植樹に来たとき、この場に立ったかはっきりしませんでしたが、この鉄製のハシゴを何回も黒土と腐葉土を運び、穴掘りをした苦い経験を思い出しました。多分そのときは、ポット苗づくりと民集の森の植樹をしたと思います。森の中で、森に包まれていると何故か自分にエネルギーが充電されている不思議な力が湧いてきました。

参加者の皆さんのお話を聞いていると、様々な形での森への関わりがあることがわかりました。次世代の森びとプロジェクトの皆さんは、ユーモアあふれる人たちばかりで、安心感があります。競争の森から母なる森をめざして頑張ってほしいと思います。人間は森に生かされている。森に寄り添ってしか生きられない。森は友だち！これを実感したひと時でした。ありがとうございました。私たち夫婦に出来ることは、小さいと思いますが、自分たちに出来ること、森びとに協力できることを背伸びせず、身の丈を意識してこれからも活動していきたいと考えています。

正会員　菊地茂

山と心に木を植える
森
Forest People Project
森びとプロジェクト

森の仲間たち

4･29 中倉山の「ブナ恩送り」

●一登山者の立場から

私たち夫婦が初めて中倉山を登ったのは、昨年11月中旬でした。登山ガイドの松原美成子さんからご提案をいただきました。それまで「孤高のブナ」のことは知りませんでしたが、もしかしたら映える写真が撮れるかも、と期待しました。

この日のコースは、最初に展望台に立ち寄ってから、尾根道を進んで中倉山山頂を通り「孤高のブナ」に到達、という順路でした。

わくわくしながら展望台に着くと、意表を突く絶景に圧倒されました。「ここは日本？」「しかも足尾？」と。まずはその高さ。向かいの山との間が大きな深い谷となり、広大な広場となっていました。そして広場は砂色の無機質な構造。こんな風景は見たことがありませんでした。特に切り立った崖側は、岩や砕けた石が山肌を覆って、茶色っぽい草しか生えていませんでした。それでも、山頂方向の斜面には、低木が密集している場所があり、その木々が渋い赤色に紅葉していたのが生命感のある美しさでした。歩を進めて山頂に到達し、その先に「孤高のブナ」が現れました。そこで私は「あらやだ！ブナの地面に青いシート？写真に写っちゃう」と言ってしまいました。そのころには天気が小雨になっていて、あまり景色を楽しめる状況ではなかったのですが、その中でブルーシートのような青がとても目立っていたのです。

すると、私の言葉を聞いた松原さんが、少し困ったように「私も参加してるんですけど、あのブナを保護する活動がありまして…」と話してくれました。出発前から松原さんに煙害と保護活動のことを聞いていましたが、現地で目で見てやっと結びついたのです。展望台からの景色にも合点がいきました。そして、今回の活動への参加となりました。再び松原さんとご一緒できるのが嬉しかったのですが、前回たかがスマホの写真なのに「あらやだ」と言ってしまった後ろめたさもありました。

実際に参加してみて、準備の細やかさ、大変さを感じました。参加者が運ぶ土は、負担の無いように小さく袋にまとめられ、ザックに入れても他の荷物を汚さないよう配慮されていました。そして、その土にはあらかじめ植物の種を混ぜてあるとのこと。もし植物が成長すれば、ブナを守るために大切な力になるのでしょう。また、土はそのまま置いただけでは風で煽られて飛んでしまいます。一つ一つをペグで留める作業もあり、その道具類も運ばれていて、至れり尽くせりでした。

作業が一段落したところで、以前に土を留めた場所とその後の変化を見ました。乏しい土に張った「孤高のブナ」の根が、砕けた岩の上にむき出しになっている部分がありました。そこを柔らかい芝のような植物が、そうっと覆い始めていて触るとふわふわとしており、森が戻ろうとしている、と感じました。

下山してから登山アプリを確認したら、累積標高差が800mを越えていました。私にしてはすごい運動量です。そして、今まで考えもしなかった活動に参加して土を運び、「やった感」までをも頂戴しました。良い疲れでした。機会を下さった松原さん、この活動を支える多くの皆様、どうもありがとうございました。中倉山が皆で運んだ土をもとに、いつか緑色に輝くことを願っております。

ボランティア　松村光代

何が大切かを学んだ 4･29 ブナを元気にする恩送り！

当日、「孤高のブナ」と「希望のブナ」のある中倉山の尾根付近は晴れてはいたが、強風と時折粉雪が舞う最悪の気象条件下での作業となりました。

しかし、スタッフとボランティアすべての参加者が、なぜか元気で明るく寒さを吹き飛ばす、やる気に満ち溢れているように見えました。

「孤高のブナ」の保護では、腐葉土を植生袋に詰め替え、根の部分への貼り付けとペグでの固定をあっという間に終了させました。これは、亜硫酸ガスによる煙害の生き証人として、「孤高のブナ」には絶対に生き続けて欲しいと強い思いが行動（実践）に繋がったからだと思います。

「希望のブナ」の観察では、獣害柵を外して成長具合を確認することができました。幹回りが直径 2 ㎝、高さは昨年よりも 10 ㎝生長していました。そして、新しい立て看板を建植し、お披露目式を行い、本当にうれしい思いでいっぱいになりました。

式では、本日の参加者は 48 名であると報告を受けました。毎回新しい参加者が増え、ブナの保護活動の輪が確実に拡がっていると確信しており、まさに「継続は力なり」です。2017 年以降、年に 2 回日程を決めて地道に努力してきたことや、「孤高のブナ」の種を蒔き、「希望のブナ」を移植し育ててきたことが、多くの人の感動を呼び、この活動に参加してくれているのだと思います。

また、水上山岳ガイドの松原さんが、スタッフの済賀さんの働きかけで今回初めて参加をしたと話がありました。やはり声かけという行動（実践）は大切であることを学びました。

「継続は力なり」「努力は決して裏切らない」を内に秘め、さら大きな輪を目指して、明るく元気よく笑顔で前向きに、これからもみんなでブナ保護活動を頑張っていきましょう。

正会員　鈴木力

4.29「恩送り」に参加して

中倉山は登り始めから急斜面が続きロープがあるなどきつく、途中の尾根に出たあたりから緩い斜面となり登りやすくなります。途中、ピンク色の花が咲いていたり周りの山が見渡せる絶景ポイントがあったりなど登っていて楽しい山です。その為か一般

の登山者とも多くすれ違い、中倉山の認知度が上がっているのだなと感じました。

孤高のブナが生きる稜線に到着し、孤高のブナの雄大さに心が奪われるとともに、稜線を挟んで草木が生い茂る側と岩や瓦礫が露出し死の大地と化した側のあまりにも違いすぎる景色に人の傲慢さが見えました。銅を精錬するために出た亜硫酸ガスは旧松木村だけでなく流域の村にまで影響を及ぼし、生活ができなくなり廃村となった村もあります。孤高のブナは人の業を訴えかけているように見えました。しかし、希望も見えました。2017 年に行った保護活動の場所を見ると、植生袋から草が生えブナの木の根を覆っていました。本当に少しずつですが、人の手によって守られているのだと実感しました。もう一つの希望として、「孤高のブナ」の子で「希望のブナ」という存在があります。「希望のブナ」は、1 年で 10 ㎝しか成長しておらず、歯がゆいかもしれませんが、過酷な環境でも一生懸命生きようとしている姿に元気をもらえました。

足尾の山々を壊したのは人ですが、それを戻すのも人だと思いました。長い年月がかかりますが、諦めず前を向いて地道に活動をしていこうとも思いました。仲間に森びとプロジェクトの活動報告を行い、活動の意義を理解してもらい協力を呼び掛けています。自然破壊は世界で広がり、また暮らしやすい環境を求めてエネルギーを大量に消費しているため、止むことはありません。未来を生きる子供たちにも住める地球を残していく為、地道ではありますが活動を続けていきます。

正会員　矢野雅之

南相馬発！
ようこそ、南相馬の森へ

2025/6/8
第 13 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭

2011 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分東日本大震災発生しました。マグニチュード 9（最大震度 6 弱）南相馬市では、高さ 18ｍを超える大津波が海岸防災林を壊滅させ、636 名の尊い命が奪われました。あれから 14 年の月日が流れ、改めて亡くなられた皆さまのご冥福をお祈りいたします。

私の中学時代の同級生は、津波によって、我が子と義母を失いました。どれほど悔しく、辛かったか計り知れません。

現在、世界各地では気候変動により、海水温上昇や大規模な山火事、生物の絶滅の危機などが襲っています。今、私たちは何をなすべきかを問われていると思います。

私がこの鎮魂復興市民植樹祭に参加したのは、今から 13 年前の 2013 年 10 月 6 日、鹿島区南右田で開催された。第 1 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭からです。当時の私は、植樹活動には、まったく関心がありませんでした。ただ、主人が苗木の水撒きに行くのを送り出しているだけでした。ある日曜日のこと、いつものように水撒きしてくると言うので付いて行ってみました。そこは休耕田を利用した苗木置き場でした。主人は、ポット苗を指差して、どんぐりの苗木だと教えてくれました。震災前に私の実家の裏の神社から拾ってきたどんぐり（アカガシ）でした。3 年目に入り、高さは 30cm になっていました。これが 10 年経つと 5ｍぐらいになると教えてもらいました。

人間の赤ちゃんは、両親の愛情で育つように、苗木は人間が与えた水と肥料で育ちます。やがてポットから大地に根づくのを待っているのです。それを手伝うのが植樹活動だと聞いてから私は、毎年、植樹・育樹活動に参加するようになりました。

春、桜が咲き、ひばりが空高くさえずり。夏、潮風とともに森では、セミが鳴き。秋、大地となった森の中で木漏れ日にひたり。冬、厳しい寒さに耐え、樹木がやがて、春をまた迎える。ようこそ、南相馬の森へ・・・

私は、この南相馬市が大好きです。そして、これからも主人ともに、海岸防災林再生、「いのちを守る森の防潮堤づくりを担って行きたいと思っています。

最後に、植樹祭実行委員会の皆さまと毎年この鎮魂復興市民植樹祭に参加してくださっている。ボランティアの皆さまに深く感謝するとともに、この苗たちが 100 年、1000 年・・・と育っていくことを願っています。「ありがとうございました」

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊スタッフ
岩橋恵美

現地レポート

気候沸騰時代の「森づくり」の意義

地球規模で進行する気候変動は、私たちの暮らしや生命に深刻な影響を及ぼしています。異常気象、猛暑、豪雨、干ばつ、海面上昇といった現象は、すでに日常的な問題となりつつあります。前号では、気候変動の現状とそれに対して検討する材料を提供しました。今号では、気候沸騰時代の「森づくり」について、あらためて、その意義を振り返るとともに、森を守る世界の動きについて簡単にまとめたいと思います。

気候変動の主な原因とされるのが、大気中の二酸化炭素（CO2）濃度の上昇ですが、CO2 を吸収する自然の仕組みを守り活かすことが必要不可欠となってきています。その中心的存在が「森」であるといえるでしょう。「森づくり」の意義はたくさんありますが、次のような内容が主なものとなります。

① 世界最大級の「炭素の貯蔵庫」

森林は CO2 を木や土壌に固定します。つまり、気候変動の「原因」を和らげる直接的な対策となり得ます。

② 気候を穏やかに保つ「調整機能」

樹木は蒸散によって気温の上昇を抑える働きがありますまた、雨の量や風の流れを安定させるなど、地域の気候を調整する機能があります。

③ 生物多様性の保全と気候の安定

多様な植物や動物が共存することで、生態系が健康に保たれます。健康な生態系は、気候変動への「レジリエンス（回復力）」を高めます。

気候変動がもたらす影響は今後さらに広がることが予測されており、森の喪失や劣化はその悪循環を加速させる恐れがあります。故宮脇昭先生は常々「私たち人間は緑の植物の寄生者での立場でしか生きていけない」と言われていました。今こそその事実を直視すべき時であると思います。だからこそ、すでにある森を守り、つながりを回復し、失われた森を取り戻す取り組みが求められています。

気候変動や生物多様性の損失が進むなか、世界では「ネイチャーポジティブ」という新しい目標が掲げられています。これは「自然をこれ以上失わない」だけでなく、**「自然を回復させ、より良い状態にする」**ことを目指す考え方で、私たちの暮らしや未来の安心にも深く関わるものです。

こうした流れの中で、国際的な取り組みとして「30by30（サーティ・バイ・サーティ）」という目標が定められました。これは 2030 年までに地球上の陸と海の 30%を自然と共に生きる空間として守っていこうというものです。日本でもこの目標を達成するために、国立公園などの保護地域に加えて、「自然共生サイト」の登録が進められています。

自然共生サイトとは、地域の人々や団体、企業などが手をかけて自然を守っている場所を、国が認定する制度です。法的な規制があるわけではなく、それぞれのスタイルで自然と関わりながら保全活動を続けていくことが大切にされています。一般にはあまり知られていないのが残念ですが、このような形で保全地域を増やしていこう！という流れが今、主流になりつつあると言えるでしょう。

私たちの団体がこれまで行ってきた森づくりや自然体験、育樹活動も、こうした共生サイトの理念にかなり近いといえるでしょう。私たちの活動する松木や八幡平といったフィールドが地域の自然と人をつなぎ、未来に豊かさを引き継ぐ場になっていることを、外部にも発信する良い機会になるかもしれません。もちろん、すべての関係者の協力が必要ですので、ハードルは低くありません。しかし、無理なく、できる範囲で「自然共生サイト」を目指してみるのも、一つの選択肢としてあるかもしれませんね。

運営委員　小黒伸也

30by30

自然共生サイト　検索

会員を募集しています。 https://forms.gle/AsNuTDi4X7pmkFSa8　お知らせ

2025 年（毎年 1 月～12 月末日まで）の森びと会員を募っています。ご入会（継続）いただける方は、下記をご確認の上、メールまたはファックスで お申し込みください。なお、すでに会員の方には払込取扱票を同封しています。

会員種別	□正会員 1 口 5,000 円　※事業運営の構成員として森づくりに自由に参画頂くメンバー。 □賛助会員（個人）1 口 2,000 円　※森づくりを支えて頂くサポーター。 □賛助会員（団体）1 口 10,000 円～　※運営を支える企業・法人のアドバイザー。 ※機関紙を年 2 回お届けします。会費は、組織運営・活動経費に使用します。スタッフは原則ボランティアであり、人件費として使用されることはありません。会員の種別の詳細が不明な場合は下記にお尋ねください。 ※個人情報につきましては当委員会が責任を持って適正な管理を行うとともに、個人情報の保護に努めます。
申込方法	右上 QR コードからの申し込み専用フォーム、または、会員種別、住所、氏名、生年月日、性別、電話、メールアドレスを記載の上、E メールまたは FAX で、森びとプロジェクトまでお申し込みください。
振込先	ゆうちょ銀行振替口座：00140-2-364527 他金融機関からの振替用口座：店番　019　当座　口座番号　0364527 森びとプロジェクト ※大変恐縮ですが振込手数料はご負担ください。

森びとがサンモニで紹介されました！ https://michikusa.moribito.info/2025/05/post-f55a.html

5/4 のみどりの日、森びとの活動が TBS のサンデーモーニング「風をよむ」のコーナーで紹介されました！ブナの恩送りの活動、これまでの植樹活動そして、絵本「サルと人と森」などが紹介され、多くの反響を頂きました。

森びと公式 SNS 登録をお願いします。

Facebook	Instagram	森びと公式
フォローといいね！をお願いします	フォローといいね！をお願いします	ウェブサイト・ブログはこちら
@森びとプロジェクト	@info_moribito	https://www.moribito.info

編集後記

森びと 20 周年の関連で動画を作ることになり、せっかくだから森びとと古くからお付き合いのある Choji さんの音楽を使わせてもらおう！と連絡したところ、使用を快諾頂きました。Choji さんは 2017 年、横浜から三重県津市美杉町に移住し、築 150 年の古民家と、家の前に広がる田圃を拠点に「里山音楽家」「田んぼアーティスト」として活動しています。“想像できないような、1000 年後の未来も”で始まる「心の森」のやさしい歌詞とメロディに覚えがある方はたくさんいらっしゃると思います。あれ、まだ聞いたことがない？それではぜひこちらから。他の曲もとても素敵ですので聞いたことがある方もお勧めです！

Choji（チョージ）オフィシャル・https://choji.jp/（右側 QR コードからどうぞ）　運営委員　小黒伸也

森の木魂(こだま) 第 15 号（2025 年 8 月 1 日発行）
発行：森びとプロジェクト
発行人：桜井勝延
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室
TEL&FAX 03-6417-3750
http://www.moribito.info/
Email info@moribito.info